

# ディドロの宗教批判と理神論

山口 俊 治

Etude sur Diderot, sa critique à la religion établie et son déisme

Toshiharu YAMAGUCHI

(昭和54年12月3日受理)

「哲学断想」の論理と宗教批判

(1) I. から XLIV.迄 (2) XLV. から LVIII.迄 (3) LIX. から LXII.迄

「自然宗教の充足性について」の論理と理神論

(1) I. から XVIII.迄 (2) XIX. から XXVII.迄

十八世紀フランス啓蒙思想家のひとり Denis Diderot (1713-1784) の宗教批判と、彼が理神論に到る過程を初期のふたつの作品「哲学断想」*Pensées philosophiques* (1746年執筆), 「自然宗教の充足性について」*De la suffisance de la religion naturelle* (1747年執筆) に於て考察する。

*aphorisme* の形式をとっているこれらの著述は単に断片的思想を即興的に連ねたものではなく、そこには全体を一貫する論理が見られることは既に指摘されているが、ここでは各々の断想を逐次その論旨によって関連づける作業をすることによって論理の構成と Diderot の宗教観を見て行く。

「哲学断想」の論理と宗教批判

(1) I. から XLIV.迄

[I.~XII.] (I.-IV.) は情念 *passion* の賛歌あるいは情念の復権の叫びとも言えるもので、続く (V.-XII.) に於てはこの情念を敵視し圧殺するものとして信心家の禁欲的な行ないや迷信 *superstition* を批難している。

即ち、人間の徳性を高めるものとして情念を賛美し (I.-III.), 諸情念の相互の間に調和を確立すべきであって (IV.), 情念を亡ぼしてしまおうとする信心家の行為は社会性にも人間の自然な姿にも反するもので (V. VI.), 情念の否定からは残忍性や陰惨さしか生じないから、これは本当の信仰とは言えず迷信にすぎないこと (VII.-XI.), 迷信は無神論 *athéisme* よりも神を傷つけるものである。(XII.)

[XIII.~XXVI.] XIII. ではこの無神論をさらに理神論でもって否定し、以後 XXVI. 迄は、この2者を比較して考察する。即ち、迷信よりはましであったがやはり神を傷つけるものである無神論に対抗しうるものとして理神論を評価し (XIII.), 真理の探求を行うに於て理神論的姿勢を堅持しなかったとして Pascal に不満を示す (XIV.).

これに続く (XV. XVI. XVII.) では既に (XIII.) で否定されたはずの無神論が、積極的にではないにしろ一応の弁護をうけているのは、(XV.) の場合は [XII.] の「神を傷つける」か否かという道德的観点からではなくて唯物論に於て、(XVI.) (XVII.) では各々キリスト教批判、ピロニアン批判の便宜に於て無神論を利用しているにすぎず、理神論との比較によるものではない。

(XVIII. XIX. XX.) では顕微鏡による当時の諸発見、即ち、「驚嘆すべきメカニズム」を「神の証」として理神論に軍配をあげるのであるが、(XX.) の中である無神論者に言わせていることも又 Diderot の思想の一部であることは (LIX.) で Diderot 自身によって同じことが述べられ

ていることから明らかである。XXI. では XV. の論旨で唯物論を進め、続く XXII. XXIII. では XII. XIII. の論旨で無神論が批判される。無神論、理神論のいずれを選ぶべきかという思弁的考察に於て Diderot は決着をつける方向には向わず XXIII. ではさらに懐疑論者 *sceptique* が登場し、続く XXIV. でこれを定義し、XXVII. - XXXIX. に渡って懐疑論 *scepticisme* が展開されるのであるが、無神論・理神論の論争では「神を理性によって見るべき (XXV.)」, 「神を道徳として教えるべき (XXVI.)」, として理神論を一応肯定している。

[XXVII. ~ XXXIX.] Montaigne を懐疑的性格に於て称讃し XXVII., 定見論者 *dogmatique* や見神者 *illuminé* を非難する (XXVIII.), そして言う: *On doit exiger de moi que je cherche la vérité, mais non que je la trouve...* (XXIX.), 即ち Diderot は無神論と理神論の間でどちらとも決断しかねて判断を中止したのではなく、軽率な判断を見合わせて方法論に立ち帰ろうとするのである。即ち, *.....rendez sincère le pyrrhonien, et vous aurez le sceptique.* (XXX.), *.....Le scepticisme est donc le premier pas vers la vérité. Il doit être général, car il en est la pierre de touche.* (XXXI.) さらに、物を信じないことと信じ易いことの両極端をいましめ (XXXII.), その例として無神論者と多神論者を共に戒め (XXXIII.), さらに臆病な推論家を半懐疑論者として非難する (XXXIV.).

迷信批判から無神論、理神論を経て懐疑論に至った Diderot は再び迷信批判に戻り、既成宗教を具体的に批判することの必要性を説く。「背神の叫び(即ち懐疑論)が至る所で聞かれ (XXXV.)」, 「信心家はこれを批難するが、真の宗教を信じ間違った宗教を棄てる為には普遍的懐疑が広まる必要がある (XXXVI.)」, 「自分の宗教を主体性をもって選ぶべきであり (XXXVII.)」, これをうけて「その証拠を持たない宗教の為に死ぬ者は狂言者であり (XXXVIII.)」, 「本当の殉教者は死を待つが狂信者は死の方へかけて行く (XXXIX.)」

なお (XXXIX.) 迄を懐疑論としたが実質的には (XXXVII) で懐疑論の部は終っていて、あとのふたつの章 (XXXVIII. XXXIX) は次の章に続けて奇蹟批判の前段階とする方が妥当と思われるが、XXXVII と XXXVIII とを切りはなすことも困難であるから以上のように分けた次第である。

[XL~XLIV] 前に述べたように懐疑論は無神論や理神論と同じ命題ではなくて方法論を意味するのであるが、無神論が神を傷つけることを恐れる Diderot は懐疑論者の立場に立つことによって批判の対象を広げ、キリスト教の本質に向かおうとするのである、(XL~XLIV) は前の懐疑論の部に続いていて、迷信批判をジャンセニスト批判にまで具体化すると共に (XLV) から始められる聖書批判を準備する部分でもある。即ち、(A)「異常な信仰の否定(XL)」, (B)「啓示や奇蹟や異常な信仰の時代は過ぎた(XLI)」, (C)「支配的な宗教に反する教義を民衆に説くことの危険(XLII)」, (D)「古いものを変えることの危険(XLIII. XLIV)」

(A) はこれまでの章の結びをなし、(B) (C) によって後半につづき、(D) は (XLV) の「聖書の記述の真実性に対する疑問」へと続く。

## (2) XLV から LVIII 迄

### [XLV-LII]

..... Où en serions-nous, s'il fallait reconnaître de doigt de Dieu dans la forme de notre Bible! ..... Les prophètes se sont piqués de dire vrai, et non pas de bien dire? (XLV), このように記述の真実性に於て聖書の神性に疑問をいざくことに始められ、続く (XLVI) からは神性の証とされる奇蹟 *prodige* あるいは *miracle* を批判する。

即ち、歴史の記述者によって奇蹟が作り出されたこと (XLVI.), 多くの証言がその真実性を証明しているとされる奇蹟に対しては Cicéro の言葉を引用して「理性的な論拠によって証明すべきであって事実によって証明すべきではない」、「奇蹟は大衆の無知に根ざすものであり」(XLVII), 「あらゆるものの証明に使われるけれど、それ自体はいっこうに証明されていない」(XLVIII). 奇蹟は時と共に補強されること (XLIX). (L) では (XLVII) の Cicéro の引用を Diderot 自身の判断として述べ、続く (LI), (LII) は一対をなして、奇蹟とみなされる現象の虚偽をあばき (LI), さらに、このような現象を利用しようとするジャンセニストの精神主義を批判し、理性に従うべきことを説く (LII).

以上 (LII) 迄は奇蹟に対する客観的考察がなされたのであるが、続く (LIII, LIV) では本質論に入り、奇蹟を信じ込んでしまう大衆の心理を説明する。

### [LIII—LVIII]

Je jurerais bien que tous ceux qui ont vu des esprits, les craignaient d'avance, et que tous ceux qui voyaient là des miracles, étaient bien résolus d'en voir. (LIII), …… que ces miracles ne prouvent rien, tant que la question de ses sentiments ne sera point décidée. (LIV)

したがって、「奇蹟は何も証明してはくれない」(LIV), 「奇蹟を根拠とするかぎり狂信も真の宗教も同じである」(LV) とする。

迷信、狂信など「異常な信仰」の否定につづいてここでは聖書をよりどころとする「真の宗教」も否定され、「信仰をつくれるのは理性のみである (LVI)」とし、続く (LVII), (LVIII) では信仰告白がなされる。

……mais je le (= chrétien) suis, parce qu'il est raisonnable de l'être. (LVII.)

……Je suis né dans l'Église catholique, apostolique et romaine; et je me sou mets de toute ma force à ses décisions. Je veux mourir dans la religion de mes pères, et je la crois bonne autant qu'il est possible à quiconque n'a jamais eu aucun commerce immédiat avec la Divinité, et qui n'a jamais été témoin d'aucun miracle. …… (LVIII)

これは信仰告白の形をとったキリスト教否定とも言える。il est raisonnable de l'être の部分は神を否定することの道徳的恐れを表わしているし、Je suis né dans l'Église catholique の部分は (XXXVII) の主張に反するものでもある。

さらに四つの断想がつづくがこの章は一連のキリスト教批判の結論となっていて、その前半に於る迷信あるいは狂信批判に対して後半では一言でいって、その「世俗性」が批判されていると見られ、イエズス会を意識したものと思われる。

### (3) LIX から LXII 迄

最後の四つの断想に於てはキリスト教に対する疑問と無神論・理神論・懷疑論の可能性とが提示される。「道理に合っている」としてキリスト教を認めようと努めるのであるがその明証性の欠如もまた否定できないのである。即ち：

(LIX) …Je connais suffisamment les preuves de ma religion, et je conviens qu'elles sont grandes; mais le seraient-elles cent fois davantage, le christianisme ne me serait point encore démontré…

(LX) en avouant que les premiers fondements de la foi sont purement humains……et je ne refuse point d'ajouter à la divinité des livres sacrés un degré de foi, proportionné à la certitude de ces règles.

(LXI) …Les livres qui contiennent les motifs de ma croyance, m'offrent en même temps les raisons de l'incrédulité…

…elle pencha du côté du chrétien, mais avec le seul excès de sa pesanteur, sur la résistance du côté opposé ……Il n'a pas tenu à moi que cet excès ne m'ait paru fort grand ……

そして、この「しかし…」からは無神論、理神論、懐疑論が可能性としては等しく出てくるのであるが les premiers fondements de la foi sont purement humains であるから直面する課題は理神論となる。即ち：

(LXI) Ce sont des arsenaux communs. Là, j'ai vu le déiste s'armer contre l'athée…

(LXII) Cette diversité d'opinions a fait imaginer aux déistes un raisonnement plus singulier peut-être que solide… Or, ceux, continue Cicéron, à qui l'on accorde la seconde place d'un consentement unanime, et qui ne cèdent la première à personne, méritent incontestablement celle-ci.

このように理神論を良しとする定義は堅固 solide なものではなくて奇妙なものであったから、これをさらに明確に定義すべく翌1747年に *De la Suffisance de la Religion Naturelle* を著わすことになり、キリスト教批判をさらに別の角度から行うのが *Addition de la Pensée Philosophique* である。

(LXI) にはこれまで考察されてきた全ての命題の可能性が述べられるのであるが、懐疑論、無神論に関しては：C'est en cherchant des preuves que j'ai trouvé des difficultés. Les livres qui contiennent les motifs de ma croyance, m'offrent en même temps les raisons de l'incrédulité. Ce sont des arsenaux communs. Là, j'ai vu le déiste s'armer contre l'athée… et le sceptique seul contre tous……

この sceptique がピロニアンを意味するのでは勿論なく、ここでは chrétien, déiste, athée を皆 dogmatique としてこれに sceptique を対立させているものと思われるから、「懐疑論者だけが皆を敵にまわしている。」というのは懐疑論がキリスト教・理神論・無神論のいずれをも否定する可能性を述べているのではなく、最初の段階に戻ってキリスト教の明証性を問ふところからやり直すことの必要性を言っているものと思われる。Pensées philosophiques が XXVI の章に於て神の存在を肯定する一応の結論をみ、LVIII ではこれを再び確認する信仰告白を行ったのであるが Diderot には「三角形の三つの角の和が二直角に等しい」(LIX) ように明確に証明されることが必要なのである。キリスト教否定が直接的にしる理神論を間に置く形をとるにしる無神論へと移行することは Diderot に於てはこの時点ではまだ道徳的にもタブーであったから、キリスト教批判が少しでも無神論を示唆する時には彼は懐疑論者となるのである。

### 「自然宗教の充足性について」の論理と理神論

#### (1) I. から XVIII迄

「哲学断想」と同じ形式で書かれていて、27個の断想によって構成されているが、ひとつの断想から次の断想への論理のつながりや作品全体としての論理の展開に於ては前作にやや劣るものと思

われる。理神論がここでは自然宗教 *la religion naturelle* という形をとってキリスト教に替るものとしてその優位性が種々の角度から述べられるのであるが論理の重複、空転あるいは循環が多分に見られる。

「哲学断想」の最後の章で「これは奇妙な理屈ではあるが」という前置のもとになされた「だれもが同意する 2 番目」という定義はここでも生きていて、これは (IX, XIV, XXV, XXVI.) に於てくり返し述べられている。自然の法に基づく「自然宗教」という名称を与えることによって理神論に一挙に明証性、普遍性、恒久性を全て付与してしまった為に他に何も述べる事が無くなり、論理の重複するところが特に前半 (XVIII迄) に多く見られる。

[I~XII] では自然宗教の「充足性」*suffisance* を否定することが不可能であることに関してであるが、章を追って見てゆくと：

自然宗教は啓示宗教 *religion révélée* の土台であるから人の作品ではなく神の作品であり、従って不十分ではあり得ない (I, II),

自然の法が完全であるなら遠永性も持っていなければならない (III), (IV, V) では啓示による法 *la loi révélée* に対する自然の法の優位性をのべるとともに、啓示宗教は何ら新しい真理をもたらさなかったこと、その理由として：*elles (=les propositions révélées) contiennent une vérité, mais elles sont obscures ; d'où il s'ensuit que tout ce qu'on en infère doit partager la même obscurité...* (V), そして、前後するが、この不明確であるということは真理の性格に反するのであり、ここではキリスト教の原罪 *péché originel* が批判されている。

(VI) では「自然の法は十分であるから、したがって最良であり公平であり全ての法のうちでも最も神の性格に合致する」とされ、原罪を批判して *c'est la lumière que tout homme apporte au monde en naissant* と答える。

(VII) は (VI) をうけていて、以後 (XII) 迄は自然宗教の普遍性について述べられる。

即ち、自然の法によって人間が裁かれるとすれば不正は行われぬ。何故なら「人は皆自然の法によって生れたのである (VII)」として (VIII) ではキリスト教が普遍性の欠如に於て非難され、(IX) では「だれもが同意する 2 番目」なる「奇妙な」定義に普遍性が与えられる。「自然宗教は理性的存在である人間に最も適合したものであり (X)」, 「他の宗教には見られない遠永性・普遍性を兼ね備えていて (XI)」, 「全ての人々に与えられた唯一の宗教である。(XII)」

続く XIII, XIV, XV では「自然宗教は十分である。」という命題を否定した場合として、「不十分だとするとそれが十分に守られなかったか、あるいは守った人が罰されたかのいずれかである。(XIII)」, 「自然宗教の真理は自らの内に多くの証拠をもっているし、全ての宗教者はこの宗教が真実であることに一致している。(XIV)」, 故に、自然宗教の教えは誤って守られてきた (XV) として十分性を説くと共にキリスト教は不十分であるとし、「不十分な方法とは悪しき方法である。

(XVI), 「キリスト教は余分の重荷でしかない。(XVII)」と攻撃する。ここで注目すべきは「哲学断想」に於ては条件付きではあるがキリスト教徒であった Diderot が *je ne le (= chrétien) suis pas encore* (XVII) と言明していることである。次の (XVIII) は (I) の神の作品という定義をさらに普遍的に、自然主義的に定義しなおしたものである。

XVIII. Tout ce qui a commencé aura une fin ; et tout ce qui n'a point eu de commencement ne finira point. Or le christianisme a commencé ; or le judaïsme a commencé ; or il n'y a pas une seule religion sur la terre dont la date ne soit connue, excepté la religion naturelle ; donc elle seule ne finira point, et toutes les autres passeront.

この (XVIII) を (I) から (XVI) 迄の章との関連に於て位置づけると：(I)～(V) では自然宗教は自然の法にもとづくものであるから十分なものであり、(VI)～(X) 従って最良であり、(XI, XII) 普遍性をもつものであり、(XIII, XIV) 真実であり、(XV, XVI, XVII) 善である。というように自然宗教の十分性の説明を全体的、あるいは抽象的な面から始めて、より人間と関わる方向へ進めてきたのであるが、ここで再び元に戻って、その恒久性をより明確に証明したものである。

## (2) XIX. から XXVII 迄

[XIX. – XXIV.] では前半 [I – XVIII] で証明された自然宗教の十分性が本質的にはほぼ同じ内容でくり返されるのであるが、特徴的なことは、啓示宗教との比較に於て、より具体的に述べられていることである。(なお、比較されてより具体的に、という意味では XVIII. を後半に入れることも妥当かと思われるが、ここでは XVIII. を前半の終章としておく.)。以下、「自然宗教」に対して「啓示宗教」という形で列挙してゆく：

「神に属していて何ら証明を必要としないもの」に対して「人間に属していて無限の証明を必要とするもの」(XIX), 「人の心に書かれていてあらゆる変遷からまぬがれているもの」に対して「書物に曖昧さでもって書かれていて自らの内に固有のものとして変遷の源を有しているもの」(XX).

以上 (XIX, XX) は前半の (I – V) のくり返しであり次の (XXI, XXII, XXIII) は善悪に関していて前半の (VI – X) に当る部分である。(XXI)の問いの答えは (XXIII) であるが、その前に (XXII) に於てキリスト教の場合が考察され、「光の代りに無限の闇と 困難をもたらすものである。」として原罪説が否定され、続く (XXIII) では対比がなされる。即ち、「自然宗教は善のみをなし決して悪をなすことはない。」に対して「啓示宗教は人間の不可思議な原理に基づいて、必然的に不明瞭で、ただ軋れきをもたらすだけである」と、さらに「啓示宗教は無数の不幸を作り出し、人間を互いに武装させ……」としている。

(XXIII) をうけて、(XXIV) では「神の普遍的愛と永遠の公正さに疑いを広げる système を棄てなければならない」とし、さらにキリスト教を「愛の偏狭性、不定性」等の故に完全に否定し、続けて「これと反対に自然宗教が十分であるということになれば全ては秩序に帰し、神の愛と公平さに関しては私は最も崇高な概念をいだかざるを得なくなる。」とする。

作品全体に於けるこの章の位置づけを考えると、Diderot がこの作品を書くことになった動機は「哲学断想」の (LXI, LXII) に明らかのように、ひとつは理神論の定義づけであり、もうひとつはキリスト教をさらに徹底して批判することであったから、キリスト教を完全に否定すると共に自然宗教を徳性に於ても十分であるとするこの章はこの作品の結論をなすものといえよう。

(XXV) は (IX) の「だれもが同意する 2 番目」という定義を反対の側、啓示宗教の側から定義しなおしたものであり「世界中の宗教は皆、自然宗教の分派にすぎず……異教的かつ離教的自然崇拝者にすぎないと言えないだろうか？」と仮定し、これをさらに (XXVI) の「自然宗教だけが存続する唯一の真理では？」という仮定に移し、次のように証明される。簡単に述べると：「あるひとつの宗教をとってみても、各々の信者の信仰の度合や教義の理解の度合は様々であり、さらに、ある人が肯定するところを別の人は否定するといったように極端な違いさえ生じるものであるから、皆が一致するところをとると彼らはみな自然崇拝者、即ち理神論者にならざるを得ない。」

キリスト教を否定し、自然の法にのみ従うべきであるとして次第に神から遠ざかりつつあった Diderot が、ここに、この作品に於ては初めて理神論という言葉を用いることによって、彼の自然

宗教が理神論であることを表明している。

終章 (XXVII) は 3 つの部分 (13 行目 *comme l'ombre* 迄 ; 13 行目 *ce qui* から 31 行目 *à la destruction* 迄 ; *Les siècles* 以降) に分けることが出来る。これを順に A, B, C, とすると, A には (XVIII, XIX, XX) の内容がそのまま, 即ち, 明証性, 普遍性, 永遠性に於て自然宗教を肯定し啓示宗教を否定する形で対比され, B には (XXI~XXIV) が, 即ち, 徳性あるいは秩序の有無に関して同じく両者が比較されている。C はこの章の独自の部分で, 全ての宗教の末路と自然宗教による未来像とが述べられる。未来像の部分を用いると,

(…) *c'est alors qu'ils ne formeront qu'une société; qu'ils banniront d'entre eux ces lois bizarres qui semblent n'avoir été imaginées que pour les rendre méchants et coupables; qu'ils n'écouteront plus que la voix de la nature, et qu'ils recommenceront enfin d'être simples et vertueux.* (…)

さらに最後を引用すると,

(…) *et je vous ai promis un bonheur auquel vous avez renoncé et qui vous a fuis pour jamais.*

「宗教は人間を意地悪で罪深くする為に作られたとしか思われず」, 「宗教をなくすれば人は単純でかつ有徳であることをふたたびはじめるであろう」という主張は, (この論文では考察の対象としてはいないが)「啓学断想追補」(アセザ・トゥルヌー版)の最後に付け加えられている 2 つの断想の内容と一致するものである。

*Pensées philosophiques* と *De la suffisance de la religion naturelle* とを比較して, Diderot の宗教観に変化があったかどうかを簡単に述べると, キリスト教に関しては明らかに見られる。*Pensées* で批判されたのは迷信, 狂信, 世俗性であり, 聖書批判も奇蹟の非科学性についてであったが, *La Suffisance* では原罪の思想を否定することによってキリスト教が本質において否定されているし, *Pensées* では信仰告白を行なっているのに対して *La Suffisance* では「私はキリスト教徒ではない」と表明しているからである。

次に理神論に関しては, *Pensées* に於る理神論は「宇宙のみごとな調和」あるいは「自然の驚異」を神の証とするもので Diderot の独自性を有するものではなく, *La Suffisance* に於て (IX) に *Pensées* の (LXII) をそのままくり返し, これを (XXV, XXVI) で結論的に述べているように変化していないと思われる面も見られるが, これは *La Suffisance* の部分であって, 本論に於ては理神論を自然の法則によって説明し, 「始まりを持たぬもの」, 「自から何ら証明を必要としないもの」「真実なるもの」とすることによって, これを科学的真理に近づける方向が見られる。しかし Diderot にとっては真理は善であり秩序であらねばならなかったから, やはり「神に属するものである。」とされるのは, *Pensées* に於て無神論を否定しながら唯物論を否定することは出来ないのと同じで, この 2 つの作品が人間の徳性を問題にしている限り, この段階に於る Diderot にはやむを得ないことであった。彼が決定的に無神論者になるには実験科学的題材を扱った作品 *Lettre sur les aveugles* をまたなければならない。

使用文献: *OEuvres complètes de Diderot*, éd. par Assezat et Tourneux. 1875-77.

参考文献: 「哲学断想」野沢協訳 (小場瀬卓三・平岡昇監修「ディドロ著作集」第 1 巻より)